

又大椿兩八千之春秋以祝遠大乎松平伊賀太守源忠晴尤愛此花雖然夙夜公務不遑築塢灌花於是取諸方所有品色及有其名者一百種圖其形樣以爲怡目之慰丹青煥發四時不凋與一歲一枯榮者不可同日而語也嘗聞山陰韋氏之百梅携李張氏之百菊播名于中華未聞百椿之美至于如此也可謂大平之勝事好文之嘉徵也太守之用意誰不歆羨乎或人曰繪花者不能繪其香曰然有說于此綠苔青草惟是德馨而今況於椿花乎嗚呼色也香也念茲在茲可不勤哉遂書以應其請焉

〔古今要覽稿 草木〕つばき

○海石榴  
○中略

寛永の頃に至りてはその花に重瓣千瓣赤白間雜の奇花八十種あまり百出するを以て京師にてはこと好む人その花をことごとくあつめて百椿圖を忍がきたるに鳥丸光廣卿はそれが序を作り給ひ扶桑拾葉集江都にては松平伊賀守忠晴公務のひまに諸方にある所の品色及び名たるものをもとめて同じく百椿圖を忍がきたるにそれが序つくりたるは林祭酒道春なり羅山文集それよりまた九十年を経て享保中には染井の種樹家伊兵衛といふ者の著せし地錦抄に載せしはその數すべて二百二十四種也今に至りては猶また種類多くいできておほよそ四五百種にも及べるは實に太平の勝事なりかく本邦にはその種類おほきものなるに西土にては其種わづかに甘種に過ぎざるを以て朱舜水も此邦の花は唐土よりも種類多くして花もまされりと朱氏談綺東雅いへり然りといへども近衛家熙公の仰に種類多きものは一々漢名あるべからず略○中是によりておもふに菊や椿などは人の好みによりて數多になるものとみえたり一々漢名あるべからずと

〔槐記〕享保九年閏四月十八日仰ニ照○近衛家後西院ノ御時山茶ヲ御好アリケレバ處々ヨリコレヲ獻上ス珍花ハ手鑑ニシテ極彩色ニテ片表ニ九ヅ、花ヲ記サレシニ年々ニ冊數多ナリケルホドニツイニ五十卷バカリニナレリ所詮カギリナキコトナリトテ止ラレタリコレニヨリテ